

「弘法井戸の災難」

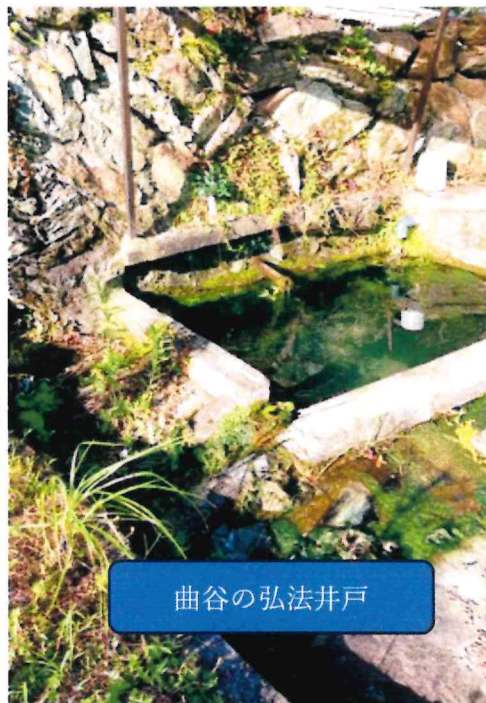
感染症と言えは新型コロナウイルスが思いおこされますが、わか町では、明治43年から昭和9年にかけて腸チフスに悩まされた時期がありました。腸チフスは、サルモネラの一種であるチフス菌によって引き起こされます。潜伏期間は7～14日間ほどで、発熱や発疹、腹痛や下痢などが起こります。日本では、昭和初期から昭和20年ごろまでは年間約4万人の感染がありましたが、その後、衛生環境の改善により年間約100例程度までに減少し、現在は3類感染症となっています。この話は、紀美野町の前身の野上町になる前の東野上町での出来事です。

昭和11年発行の『東野上町誌』によると、「近年、腸チフスの発生に悩まされしことは返す返すも遺憾なりき。最近30年間に關して3回の大流行を來たし」と記されています。「第1回は明治43年、曲谷を中心に40～50名の多数の患者を出し、昭和2年は、またも曲谷・小畑に発生。当地曲谷に在りし、野上製糸工場の女工に蔓延、その期間たるや長く、曲谷弘法井戸の如きは前後数回に亘つての消毒を行う有様なりき。これが費用も臨時予算として7,000円の増額をなすに至れり」とあります。感染を拡大させないため消毒が繰り返されたようです。製糸工場の女工さんたちにとっても災難でした。

「その後、2・3年に1・2名ぐらいの患者を見るのみなりしが、昭和8年12月末、またもや曲谷・小畑に発生し、下佐々にも蔓延し、昭和9年の始めにかけて30名近くの患者を出し、隔離病舎の臨時のやむなきに到り、一般町民の恐懼またひとかたならず、嚴重なる消毒、一般病家への見舞御遠慮申し合わせ、医師の伝染病予防講演、学校始め各種団体の予防宣伝歌、その他町民全体の予防注射等あらゆる手段をもって、これが予防撲滅に当たりしゆえ、その期間も短くわずか9名の死亡者を出せしのみなりしは、一般町民の衛生思想普及せし所似なり。」・・・

少し長い引用になりましたが、私たちがこの数年、新型コロナウイルスの対策に混乱した経験と重ね合わせると、歴史から学ぶことも多いように感じます。

(令和6年8月8日)



曲谷の弘法井戸